福岡県現代俳句協会会報
第60号
令和3年11月

福岡県現代俳句
秋の吟行大会報告

森　さかえ

新型コロナウィルスの対策のため、福岡県でも緊急事態措置が9月30日まで行われました。福岡県現代俳句吟行大会を10月3日（日）に予定していましたので、この緊急事態措置が解除されるかどうか、気を揉む事になりましたが、なんとか解除され、予定通りに実施する事が出来ました。

当日は、緊急事態措置解除後の初めての日曜日という事で、吟行大会会場の「到津の森公園」は親子連れで大賑わいでした。

朝、車を駐車場に入れるのに長い列が出来ており、7月に打ち合わせに来た時とのあまりの違いに驚きました。

北九州市の人によると、小学校の遠足の定番がここ「到津の森公園」で、動物園と遊園地の思い出深いところだという。

今は、公共の交通機関はバスだけになったが、以前は市内電車が走っており、交通の便も良かったそうである。

駐車場は会場のある南ゲートではなく反対側の北ゲートの横にあります。

車を止め北ゲートから入場。ロバや山羊のふれ合い広場からレッサーパンダやワオキツネザルなどを見ながら下っていくと池があり、その横にバードケージがあってピンクのフラミンゴが優雅に歩いています。大会会場は、南ゲートの管理センターの会議室です。

吟行大会参加者

机や椅子を並べ、準備が整ったところで受付開始です。

投句は、秋晴れの空の青さにかけた当日席題の「青」一句を含む属目三句。

十一時から受付開始。コロナの緊急事態措置は解除されたものの、果たして参加者はあるのかと心配しましたが、19名の参加者があり、なんとか大会の格好が付きました。

十二時三十分に受け付け終了。投句作品の清記を終えて十三時から開会です。

会場の外からは親子連れの賑わいに負けじと会場近くのフクロテナガザルの吠える声が響いてきます。

そんな中、福本弘明会長の挨拶の後、五句選の互選をし、披講。その結果

天賞

秋天へ獣の叫び子の叫び　　中村　和男

地賞

秋風を誘っておりぬ象の耳　　山本　悦子

人賞

サルなんかになるんじゃなかった木の実降る　　黒川　智子

秀逸

草の実の弾け新たな変異株　中村　重幸

水鳥はムー大陸の夢をみる　森　さかえ

縞馬の尻ふくぶくし新松子　田中　葉月

少子高齢忘れし秋の動物園　福本　弘明

象の目に映る人間秋日濃し　堀川かず子

佳作

秋風にまだなじまない象の鼻　三舩　熙子

知らぬ子の笑顔を貰う小春かな　佐藤　英基

捨てられぬ間引菜ばかり一人膳　上野　行灯

秋日なる木々の間に間に象の耳　夢野はる香

高得点句を中心に、福本弘明会長の司会で合評会が行われました。和気藹々の中、けっこう辛辣な評もあり、楽しい時間を過ごしました。

合評会の後は表彰式。会長から賞状と図書券の賞品授与。秋晴れの中、コロナに負けず有意義なひとときでした。

当日参加者の一句

秋うらら象のサリーは別居中　中川屹城子

はらはらとかしわ飯から秋こぼれ　香山つみれ

老人は驢馬で結構たうもろこし　冬野　起助

小さな森にけもののにおい秋暑し　川﨑美知子

木の実よりキャンディーといふ小猿かな　大木　吉廣

テーブルのむこうはキリン秋の風　上野　一子

まだ固い石榴象には美しき耳　大下真理子

会場風景

ヤギさんのお出迎え

会員三句競作

今回も、会員の皆様に「当季雑詠三句（三句内）、そのうち一句は月の句で」自由参加ということで募集したら、たくさんの方が投句してくれました。ありがとうございます。なお、配列は到着順です。

金泥が隙間を埋める雁渡し
木の実降る隙間を少し埋められず
月光が波の隙間を埋めてゆく　安徳由美子

雲を突き放ちたる遠い花野
蜻蛉の磐座なれば低く飛ぶ
二駅の切符を買って月の径　中川屹城子

空気銃ほいと渡さる月夜かな
内堀を埋む星空と萩の風
八十島に防空壕ののこる秋　秦　夕美

二日月手を出したのはあんただよ
水蜜桃ちからがぬけてしまいます
下紅葉さてさてさばくことにする　上野　一子

また一歩月に近づく誕生日
満月をかじるためにも歯を磨く
ふたりして月見酒にはほど遠く

三舩　熙子

鬼の灯と知らぬ少女やほほづき揉む
みちばたの蓬で止める男の血
月よりの使者かダイナの弦の音

小倉　斑女

蜩の鳴き初めし朝鎮魂碑
北欧の白夜の風車遠き旅
秋の月パラリンピックの聖火消ゆ

川原　昌子

夏鶯ベンチがあったので憩ふ
ワン切りの電話の鳴りて熱帯夜
天窓の月を拝みて寝につける

土田　利子

蟬の穴たどれば森の音楽祭
名月や遺影の父の若き眉
銀河濃し刻々迫るコロナの目

水城千恵子

赤とんぼ余分なちからなどいらず
野分過ぐ風にも爪のあるらしく
捨て舟は月の光に耐えており

中村　和男

通草の実けもののやうに疵舐める
もしかしてわたしついてる秋蛍
その辺でいいではないか菊月夜

田中　葉月

コロナ下のオリ・パラ勢う雀蜂
名月や何処に居ますかかぐや姫
鳥渡る関門海峡朝ぼらけ

広瀬　邦弘

月光に眠り薬を溶かしぬる
満月を水よりこぼし店仕舞ひ
月よりも大きな鏡買うて来し

山本　則男

白萩に灯りをこぼす堂の燭
月明り観世音寺の浮かびくる
ちちははの夫の影添ふ月見かな

引野美沙子

鍛金の奥へ奥へと十三夜
遠く近く大地に刺さる彼岸花
月の色千年の濁りすすむのみ

岩坪　英子

月見草ごっこ遊びに姫ふたり
決めるまでこころは振子神の留守
三日月や何を掛けるか夢見がち

堀川かずこ

宇宙船の中で石榴を食うてみよ
三センチ遺影をずらす台風圏
無月だと分かっていても空をみる

池田　守一

満月の中より銀河鉄道来
とんぼうをひとみにいれてよちよちす
手渡さる木の実のぬくみ子のぬくみ

大瀬益太郎

コロナの地球洗うがごとし今日の月
人類に地球は宝木の実降る
蟋蟀に命預けて眠りけり

中島直四郎

満月の猫欲しくなるロシアンティー
秋晴れのジャスミンティーまだ帰れない
あなかしこ風にも鳥にもなれませぬ

大下真理子

父よ母よ敬老の日の五目飯
深む秋お出掛けですかどちらまで
コロナ禍の月が真ん丸明日は晴

片山　亀夫

月夜茸お伽噺じゃありません
足裏より九月の海の欠けてゆく
株刈りの晩秋といふ広さかな

矢野二十四

餓鬼草紙みんなで覗く月の井戸　森　さかえ
初時雨通りすがりの人らしい
秋あかねあなたのゐないことに慣れ

月涼し葉擦れの音に水の音　山際はるか
身に馴染むゆるい暮らしや稲の花
あとがきを先に読む癖ひよんの実

名月や塾の難問閃きて　中村　重幸
脇役も芝居のピース星月夜
無人駅出迎えぽつり曼珠沙華

月を見て月に見られて帰路につく　福原　弘子
衿あしの白き義経菊人形
終止符のなき湧き水や水の秋

十六夜や空の開きたる駐車場　本田　進
小窓を過るキリンの首や秋の朝
朱嘴鶴を見上ぐる家族秋澄めり

エレベータ昇りて月へ近づきぬ　中西みつよ
月天心深きお辞儀の鴨鍋屋
月白や黒猫よぎる旧市街

秋冷の古墳に青き須恵器片　木村　厚子
埋め戻す発掘現場月明かり
新涼の古代引き寄すX線

月光の重さ加はるベビースケール　玉井　葉子
満月を出し入れしたる入り江かな
宙返り自在に月を転がして

もたもたと話がしたい十三夜　鍬塚　聰子
ちちふさは無口軽きは藍の花
零余子飯辻褄合わせないつもり

黒点の天道虫に太陽に　鳥巣　徳子
コロナ禍を立ち止まる五波十六夜
秋蟬のいのちの尿りぼんのくぼ

十五夜へ乳母車押す縄電車　波田　美城
観音の御目うっすらと銀杏降る
友送る夢のつづきの花野かな

正面に月が出ていて恥ずかしい　黒川　智子

「俳句とわたし」

田中葉月

外面良男のプチモラハラ夫。ずっと反抗期、車改造に大金をつぎ込むバカ息子。

ダイエットとお洒落に余念無し一日中鏡の前でニタニタしているバカ娘。とまあ、俳句を始めるタイミングは良いときだったと言うより、もっと早くに出会っていたら頭の髪の毛が全部抜けそうな思いをしなくても済んだに違いない。

とはいえ「俳句とわたし」についてと言われても考えたことないのでなかなか言葉が見つからない。強いて言えば日常から非日常へ、家なら一階から二階へ。更に意識と無意識の間にある前意識を少し高い所に置いて自由気儘に心を遊ばせる事だと思っている。現実では到底不可能なことでも俳句の中では許される。見えぬ物を見、聞こえぬ物を聞きである。

面白いし楽しいが大変難しい。

満足のいく句はまだまだといった所だが其処に辿りつきたくて続けているような気がする。先達の句や佳句を知れば知るほど其処が遥か遠くに思える。彼らの造った湖で泳いでいるだけの様な気がしてしまう昨今である。

会員特別作品二〇句

亀の鳴く

中村　和男

稲刈りしふるさとはいろ淡きかな
行く秋の母の笑顔を見にゆかん
指組めば指の温もり石蕗の花
木強の男老いたり初時雨
閉店の貼り紙に雨冬に入る
マスク忘れて狼に囲まれる
マスクしてさよならもなき別れ
除夜の鐘ぐあーんと響き心せよ
一升瓶ぽつんと置かれ初詣
子守歌途絶えし村に雪のふる
寒明けて次の一手を見失う
寒明けの土にいのちの色兆す
啓蟄や聞き耳立てしものあまた
揚げ舟のペンキ塗りたて水温む
点滅のつづく東京鳥帰る
夕霞会いたき人に逝かれけり
卒業式一人の旅の始まりぬ
俊敏な雑魚の群れなり卒業す
葉桜となりし日常流れゆく
今生のウィズコロナを亀の鳴く

会員句集紹介

「木星は遠すぎる」　森　さかえ

うららかに影より影のうまれけり
鳥風にかまくらばくふきらきらす
春の海指を入れればちゅんといふ
再起動するやのたりと春の海
ふと吾を見かけてをりぬ花の昼
かたつむりどこへ行つても雨になる
夕顔にこの世の顔もまざりをり
ひまはりを過ぎひまはりの色となる
木星は遠くて冬がきてしまふ
息止めてほつと銀河を吐きだしぬ
鳥渡る白秋全集ひきつれて
晩年は虫など飼つてくらします
神無月ああもう錆びてきましたね
生きること死ぬことけふは寒いこと
新年がのらりくらりとやつてくる
そのうちに死にますなあと日向ぼこ
ゆきひらも夢のひとひら冬かもめ

「遠花火」　中村　和男

みちのくに人あり方言の温かし
雨となる旅の終わりの花林檎
石ひとつ置かれて墓や鳥かえる
柿若葉ざぶざぶ顔を洗いけり
老いゆくは母の二の腕更衣
田を植えて大地ゆっくり太りゆく
大寒のかたち崩して雨のふる
春しぐれ図書館をすぎ橋を過ぎ
縄跳びの縄のかたちに春の山
陽炎や母は名札を掛けられて
やや寒き西口を出て呼ばれけり
十一月無音の空のおそろしき
人並みに生きてつくつく法師鳴く
綿虫のとぶ日の母は縁側に
巫女ひとり擦れちがいたる秋の蝶
イマジンの流れる町の水澄めり
遠花火母の眠るを見ていたり

※平成29年刊行

「福岡現代俳句419の会」

平成二十六年、現代俳句協会員を中心に発足。419は、4月19日発足の句会に「よい句」をかけてみました。現在10名ほどの句会ですが、遠慮の無い批評をぶつけ合う密度の濃い句会です。

多くの皆様の参加をお願いします。

句会　毎月第3土曜日(変更もあり)
13時30分から15時30分
会場　北九州市戸畑区中本町7-20
戸畑生涯学習センター(変更あり)
内容　3句持ち寄り、互選、合評
参加資格　現代俳句に興味ある人
問い合わせ先
TEL 093-475-1070(黒川智子)

「福岡現代俳句の集い」

昭和五十五年十月、現代俳句協会員の親睦と研鑽を目的として、故大山安太郎現代俳句名誉会員を代表として発足しました。

現在、現代俳句協会会員の中島芳昭を代表として、二十数名の会員で次の通り句会を行っています。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

句会　毎月第一日曜日13時から16時迄
会場　福岡市中央区赤坂2丁目
中央市民センター2階
内容　3句持ち寄り、互選、合評
参加資格　会員の内外を問いません
問い合わせ先
TEL 0942-75-0805(中島芳昭)

吉岡禅寺洞と俳誌「天の川」

吉岡禅寺洞は福岡県糟屋郡箱崎町（現福岡市東区）に明治22年（1889年）に生まれている。始め河東碧梧桐に傾倒し、その後高浜虚子の「ホトトギス」に参加し、虚子の影響を強く受ける。大正7年に「天の川」を発刊。

「清新なる器には更に清新なるものを盛るべく苦闘せねばならぬ。芸術的良心がそれである」と、発刊の巻頭言に書いている。

富安風生、芝不器男、杉田久女、竹下しづの女、久保より江などが参加し、後に横山白虹が編集者として辣腕をふるう。篠原鳳作や神崎縷々なども「天の川」に拠っている。

「天の川」は昭和18年に休刊し、昭和22年に復刊、昭和36年禅寺洞の死と共に廃刊となる。禅寺洞は無季俳句を提唱し、戦後は口語俳句運動をすすめ、昭和33年には口語俳句協会の会長になっている。そんな、禅寺洞の句を見てみよう。

残雪の山の名残を狩りあさる
鍬の柄に槍思う草霞む日に
春めくや銀ほどきたる猫柳
山川のあおさに洗う障子かな
広き葉のかさなり映る泉かな

青空に
青海堪えて
貝殻伏しぬ

黒き衣の黒き夜ぞあり
セロをきく

失業をしてゐるマスクかけにけり
アドバルン冬木はづれに今日はなき
茄子もぐ手また夕闇に現れし
土古く渡来の鶴を歩ましむ
鶴のゐるほとり平和と墓がある
鍋鶴のさびしさがちかづいてくる
田鶴飢ゑず出征旗しづかに垂るる
としどしここに渡来の鶴で老いたるもあろう
こがねむしが眠っている雲たちはパントマイム

季節の歯車を　早くまわせ
スウイトピィを
まいてくれ

多行書きの句も見られ、昭和10年に発表した「俳句は強靱なる詩である」では、俳句の自由と固定観念の打破を呼びかけている。

俳句の歴史において、禅寺洞と「天の川」の残した足跡には大きいものがあるといえる。

※「吉岡禅寺洞と『天の川』」福岡市文学館発行を参考にしました。

私の気になる一句

俳人は誰しも、好きな句、嫌いな句、気になる句をもっている。そんな一句について自由に述べてもらった。

風花のひとさしゆびの一木かな

氷室　樹

氷室は「自分自身の写実は自然の中の孤独な自己を、自然の変化の中にあらわれる生のあかしを見ようとする」という。象徴も実感も写実も迂遠のこと。俳句というもの、読者を無視して暴威をふるうたくましさに摩訶不思議の愉しさがある。

中川屺城子

雲の上に雲流れゐむ残り菊

赤尾　兜子

「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」『方丈記』の冒頭だが、雲もまたそうだ。そして雲は前世から流れき来世へ行くのかもしれない。「残り菊」には水原秋櫻子の「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」の面影がある。兜子は「馬酔木」を俳句の出発点としている。

秦　夕美

この夏を黒竜江と呼びにけり

西野　理郎

俳句を始めて、しばらく経ってから出会った一句です。現代俳句協会でも問題になった一句だったようですが、句会の席で、この句が出来たときのことを先生に伺いましたが、「家の縁側に座って庭を見ていたときに浮かんだ一句だよ」と言われました。頭で考えて作るのではなく一瞬の想いをそのまま一句にする事を教わった一句です。

三舩　熙子

起きて見つねて見つ蚊帳のひろさかな

千　代　女

揚句は多分子供の頃から知っていたと思う。しかし此の句の真のかなしみを自分の身に引き寄せて思ったのは四十三年前連れ合に突然死別した十二月。寒い夜睡れぬままこんなに部屋が広々と寒々しいのと思い乍ら唐突に千代女の哀しみが自分のものとして理解した。千代女が幼いわが子を亡くした慟哭の句をこのように静謐に書き留めた心に絶句する。コロナ禍の今突然肉身と別れなければならなかった人々の癒やされぬ心の痛みを思う今時空を超えて哀しみを実感する。

小倉　斑女

父の日の代田に考の鍬を振る

中村　和男

私の家は、代々続く農家であった。父が亡くなって十三年が過ぎ、田んぼはほとんど他の農家に作ってもらっている。だが、家の回りの田畑は自分でやるようにしている。というのも、農機具小屋には父の残した道具が、父の手の温もりと共に残っているからである。

中村　和男

椿一輪胎内におくがらんだう

秦　夕美

大切な命を育み守る胎内が空っぽだと感じている作者。女性として生まれてきた故の孤独と空虚、不安、葛藤が内界に渦巻きやがて沈積する。冷え冷えとした夜の砂漠の如き胎内に椿一輪。光も音も届かぬがらんどうに灯りがひとつともされる様に。

女性らしい繊細かつ優美な感性が光る。静謐と気品あふれる詩性がそこにある。俳句を心から好きと思えるきっかけとなった一句である。花言葉は「控えめな美」「謙虚な美徳」季語は動かない。第十句集「夢騒（むさい）」平成四年五月刊より。

田中　葉月

吾がことを知らず月下の俘虜の父

大倉　寿恵

大倉さんは昭和の戦争を知る人にちがいない父上は捕へられ厳寒のシベリアの地に抑留され強制労働をさせられた方ではないかしら。人はだれもさまざまな思いを抱き月を仰ぎみる。父への想いを月に寄せる作者の心情があるれていて感慨深い。

引野美沙子

雪霏々と舷梯のぼる眸ぬれたり

横山　白虹

所々に黄色い染みが浮かんだ短冊。六十数年前、白虹先生をお招きしての職場句会で特選となり、好きな短冊を選びなさいと言われ、一読迷わずに頂いた。初めて接した句であったが、後に、白虹先生の代表句だと知った。溢れる抒情とロマンに魅せられ、以後今日まで作句の指標である。

池田　守一

胡桃割るその一部屋の寂光土

大石真知子

これは第35回富澤赤黄男顕彰俳句大会で、特別選者後藤明弘氏の特選に輝いた句である。ホスピスのベッドに横たわる彼女に、私は大会への投句を勧めた。すでに余命宣告された季節だった。幸い、入選の知らせに二人でキャーキャー喜ぶことができた。さすがにこれが彼女の参加する最後の大会と思ったのだが・・・彼女はなんとホスピス内で三回も俳句大会を開き、ナースらの句を選評し信頼を得た。今、寂光土在住である。

黒川　智子

空豆のむかしむかしは晴れでした

萩　瑞枝

連衆91号より。身近にはコロナであり、肩の腱板断裂、足首の関節症であり、異常気象であり、水俣沖縄であり、総選挙であり、広げれば難民問題あり、と真面目に考えると辛いことばかりです。そんな時この句に出会い救われました。緑のぷっくりした空豆が青空に浮かんでいます、心地良い風景です。昔晴だったから未来も晴れに違いないと思うことができました。

鍬塚　聰子

魂の遊び疲れし曼珠沙華

村田まさる

門司の田野浦市民センターの句会に何年も通っておりましたが、転居やその他会員減のため閉会することになりました。その後、南区の曽根東市民センターにまさる師を追っかけて行ったのですが、今年4月体調をくずされ、歩行も不自由となり、「あとは波田さんに頼むね」と引かれました。曼珠沙華はまさる師のそのものの姿かもしれない。

波田　美城

《会計からのお願い》

※令和三年度年会費(一千円)のお済みでない方は納入をよろしくお願いします。

納入は同封の振替用紙でお願いします。

なお、前年度の分が未納の方は併せて納入お願いします。

また、新会員の方も、福岡県現代俳句協会の活動のもとになりますのでよろしくお願いします。

(会計　上野　一子)

コロナで明けコロナで暮れようとしている令和3年。なんとか俳句大会も秋の吟行大会も実施することが出来ました。来年は北九州で現代俳句協会の全国大会があります。皆さんのご協力をお願い致します。福岡県現代俳句大会もお忘れなく。

編集部より

福岡県現代俳句協会会報

令和3年11月(60号)

発行人　福本　弘明

編集人　森　さかえ

発行所　福岡県現代俳句協会事務局

〒839-0223

みやま市高田町岩津２９９

森さかえ方

TEL.0944-22-5332

FAX.0944-22-2530

印刷所　三池印刷